

「グリーン・マウンテン・カレッジ」のイメージ

小山田徹氏（京都市立芸術大学教授、平成29年度実施のアートディスカッションゲストコメンテーター）の発案。共有空間を獲得するという小山田さんのプロジェクトの新しい取り組みとして提案されている。

毎回ゲストアーティストを招き、参加者とともにワークショップやレクチャー、ディスカッションなどを行う、寺子屋や市民大学のようなアートスクールのイメージ。「ワークショップ」と「アートディスカッション」の要素を兼ね備えたもの。

例えば、講師としてのアーティストは参加者に課題を出し、数週間後に参加者が課題を持ち寄って、また議論、これを一つの単位（サイクル）として、8月から翌年3月まで毎月1サイクルずつ実施する。その過程をある種の作品と捉えれば「現代アート展示」の側面もある。

小山田氏には「グリーン・マウンテン・カレッジ」の校長先生またはプロジェクトのディレクター（どのような場所で、どのような方法で、どのようなコンセプトで、どのようなしつらえで、などを考える）を担っていただく形を想定。

1933～57年に、アメリカでブラック・マウンテン・カレッジという伝説のスクールがあり、これに着想を得ている。ジョン・ケージやマース・カニングハム、バックミンスター・フラワーなどが講師をしていたことでも有名。ブラック・マウンテンは地名。

（小山田さんの閃きとしては、若草山の緑をイメージしたネーミング「グリーン・マウンテン・カレッジ」という言葉が浮かんだようです。）

ブラック・マウンテン・カレッジ

1933年、アメリカのノースカロライナにつくられた芸術の学校。設立者のジョン・アンドリュー・ライスはジョン・デューイの教育理論を基本理念とし、進歩的な芸術教育を行なう非営利の機関として同校を開いた。開放的な雰囲気のもと、J・ケージ、M・カニングハム、B・フラワーなど、多彩な講師陣が同校を訪れたが、フラワーのジオデシック・ドームの最初の製作（1948）、ケージの最初のイベントである《シアター・ピース#1》（1952）、カニングハム舞踊団の結成（1953）などが同校を舞台に行なわれたことから分かるように、教育機関でありながら、双方向的なコミュニケーションと創造の場であったことが特徴である。卒業生であるR・ラウシェンバーグは卒業後も同校を訪れ、ケージやカニングハムらと共に活動した。美術ではバウハウスの講師をしていたJ・アルバー스가指導的立場を務め、芸術の知覚的・心理的作用と物理的側面の双方を重視したプラグマティックな教育を展開した。1200人近い卒業生を輩出し、資金難により57年に閉校したが、異なる芸術理念、思想、技術を共有する横断的な文化的実践の拠点として、その後の文化・芸術活動に与えた影響は計り知れない。